

Vent

音楽教育 ヴァン vol.48

巻頭インタビュー

反田恭平(ピアニスト)

特集

「学習者用デジタルコンテンツ」のご紹介

参考楽譜

リズム・アンサンブル

『Desk Drumming -part1-』『Desk Drumming -part2-』

(作曲: 松波匠太郎)



学校教育には 豊かな音楽活動が欠かせない

令和3年度各地区音研大会は、全国大会として開催の東北音研大会八戸・三戸大会始め全7地区で、実施可能な形態や規模を模索しつつ開催されました。オンライン開催、誌面発表、地域限定公開と様々な形態での開催でしたが、各実行委員会の皆様は準備段階で多くの課題を乗り越えての開催でありました。取り分け、制限が続く授業下で思うように進まない事前授業研究ではご苦心が多かったことでしょうか。令和2年度の全国一斉の音楽教育研究大会の中止を受けて、全国で「これ以上音楽教育の実践研究の歩みは止められない」との強い思いで、開催に繋がられた背景にあったものは何だったのでしょうか。

私は「学校教育には豊かな音楽活動が欠かせない」という音楽科指導者の心底に流れる願いだと思います。それは、マスク着用で囁くように合唱する「制約」からの解放という通常回帰への思いを越えて、この間に思いを新たにしたい、これから音楽科が目指すべき更に豊かな音楽活動の在り方を求める全国の先生方の強い意志だと思います。

世界が苦悩するこの状況はいつまで続くのか、めいりそうな気持ちを奮い立たせ、そして心の絆を信じて、関係者が一堂に会せる研究大会での再開を夢見て新しい年の歩みを始めましょう。

小松康裕 (全日本音楽教育研究会 事務局長)

Contents

- 03 巻頭インタビュー
反田恭平 (ピアニスト)
- 08 授業者に訊く①
菅原佳奈 (川越市立高階小学校 教諭)
- 13 授業者に訊く②
田中裕美 (目黒区立中目黒小学校 主幹教諭)
- 18 特集
「学習者用デジタルコンテンツ」のご紹介
- 22 Kyogei Presents
音楽診断 あなたのタイプは？
[第13回] ショパンの名曲編 (監修・解説：山田治生)
- 24 Information
- 26 参考楽譜
リズム・アンサンブル
『Desk Drumming -part1-』『Desk Drumming -part2-』
(作曲：松波匠太郎)
- 30 エッセイ
新・音から広がる世界 [第8回] 藤原道山

*本誌に記載されている職名は令和3年12月現在のものです。



Kyohei Sorita

第18回ショパン国際ピアノコンクール ファイナルステージ(2021年10月18日)
©Wojciech Grzędziński / The Fryderyk Chopin Institute

巻頭インタビュー

音楽は鏡

ピアニスト 反田恭平

今号の巻頭は、中学校の教科書『中学生の器楽』の口絵にご登場いただいた、ピアニストの反田恭平さんのインタビュー記事です。反田さんは2021年秋に行われた、世界三大ピアノコンクールの一つで世界最高峰と称されるショパン国際ピアノコンクールで第2位を受賞しました。コンクールを終えて日本に帰国された反田さんへのオンライン取材と、2019年に行った教科書のための取材それぞれのインタビューを、前半と後半に分けてお届けします。

聞き手 ヴァン編集部

幅広い色合いの音を出すためには、
友達関係、趣味の多さなど、さまざまな経験が必要です。
これまでの人生の歩みが音に反映されますから。



第18回ショパン国際ピアノコンクール 受賞者コンサート(2021年10月21日)
©Wojciech Grzędziński / The Fryderyk Chopin Institute

音に反映するのは人生の歩み

Vent(以下、V): この度は、第2位受賞おめでとうございます。コンクールを振り返って、どのように感じていらっしゃいますか？
反田: ありがとうございます。コンクールは、計り知れないほどの大きな経験となりました。人生観が変わりましたし、思い出は語り尽くせません。音楽とは少し離れますが、一つ興味深かったのは、ファイナリスト12名の共通点が多趣味であったことです。1位のブルース・シャオユー・リウは車の運転が大好きで、カーレースなどもするんですよ。料理が好きな人も多かったです。「ピアニストは包丁を持ちちゃだめ」みたいな風潮も昔はあったようですが、僕自身も留学したときに、料理の大切さをあらためて感じました。

V: 多趣味の方が多いのはなぜだと思われませんか？

反田: 多くの経験が、さまざまな音をつくるのだと思います。ピアノって、音を出すことは誰でもできますよね。「ド」の鍵盤を押せば「ド」の音が出る。ただし、専門家が聴けば、同じ「ド」でも色合いや性質が全く違って聞こえてくるんです。怒りのこもった「ド」、優しさのある「ド」、淡い青色の「ド」。つい最近、朝の飛行機に乗ったのですが「朝日ってこんなに美しいのか」と思う絶景に出会いました。そのような体験も、音の引き出しを増やすことにつながります。同じ「ド」でも、人の数だけいろいろな音があって、1人で何十種類もの「ド」の音を出せるのがプロです。その引き出しの多さを評価されるのも、国際コンクールの特徴です。

V: 1音の背景にも、さまざまなものが込められているのですね。

反田: 幅広い色合いの音を出すためには、友達関係、趣味の多さなど、さまざまな経験が必要です。これまでの人生の歩みが音に反映されますから。1音で、その人となりを感じ取ることができます。今回は参加者としても多くのピアニストの演奏を楽しめたコンクールでした。

二人の恩師

V: 反田さんご自身がこれまでに影響を受けた音楽家はいらっしゃいますか？

反田: うーん、特定の人を挙げるのは難しいですね。というのも、僕に影響を与えてくれた音楽家が多すぎます。ただ特に忘れられないのは、小学校と中学校のときに教わった音楽の先生です。

V: どのような先生だったのですか？

反田: まず、小学校の先生は、全力で音楽と向き合っていて子どもに伝える方でした。歌を熱心に指導してくださる姿を見ていて、4年生の頃から「この先生は、いつでも真摯に子どもと向き

合っているんだな」と感じ始めました。5年生の3月に先生が退任される時、僕が全校児童の前でお礼のピアノを弾いたんです。演奏が終わってから先生は花束を僕に持ってきてくれて、号泣しながら「あなた、絶対にいい音楽家になるからピアノは弾き続けてね」と声を掛けてくださいました。僕はまだ10歳でしたから、60歳の先生の言葉が当時あまり響かなかったのですが、なぜか頭から離れない記憶として残っていて。「音楽はこういうものだ」と教えてくださった先生でした。

V: すてきな先生ですね。

反田: 中学校の先生は、僕を大きく成長させてくれました。音楽大学の声楽科出身で、生徒たちにいつも「歌や音楽を通して何を伝えるか」と訴えかけていらっしゃいました。子どもながらに「こういう説得力のある音楽はすばらしいな」と思ったものです。そして当時、僕は指揮者になりたくて、合唱コンクールで指揮者賞を目指していましたが、1年生でも2年生でも取れませんでした。

V: それは残念でしたね。

反田: 友達には「反田が取るに決まってる」と言われていたのに、悔しかったです。だから、その先生を尊敬しつつも、指揮者賞をくれないから嫌いな部分もありました(笑)。けれども、ようやく3年生で指揮者賞を取れたんです。そして合唱コンクールが終わると先生が僕のところにきて言いました。「もし1年生で指揮者賞をあげていたら、君は天狗になっていたと思うよ。1、2年生のときに勉強して、クラスも一致団結していて、みんな反田が取ると思っていたにもかかわらず、あえて賞をあげなかったのは、君を天狗にさせてはいけないと思ったからだよ」と。

V: 先生なりの考えがあったのですね。それを聞いてどう思いましたか？

反田: 僕をよく分かっているなって思いました(笑)。僕は指揮者賞を取るために指揮を勉強して、1年生と2年生で取れなかった経験を次回に生かせるようにと考えました。その経験が成長につながったのです。卒業するときに、先生は「君は偉大な音楽家になる可能性を秘めた人間だから、常に謙虚でいなさい。人に感謝して、音楽に感謝して、これからも演奏し続けるんだよ」とも言ってくださいました。先生方二人とも、もしかしたら僕が音楽家になりたいと思っていたから、少し違う目で見てくださっていたのかもしれない。とても感謝しています。

V: 先生方は反田さんをしっかり見ていらっしゃったのですね。

反田: そんな経験から、学校の音楽の先生が好きなんです。僕は「正しい目をもつ」ことが大切だと思っていて、世の中には口先だけの人がいるかもしれないけれど、学校の先生方は正しい目をもっていると感じます。今では同世代の人たちが学校の先生になっているので、年の近い先生方を応援する気持ちはいつもあります。

音楽を好きな気持ち

V: 『中学生の器楽』の口絵で反田さんからのメッセージをご紹介しますが、あらためて今、中学生に伝えたいことは何ですか？

反田: 中学生は思春期になっているから、いろいろ難しいんですよ。例えば、合唱で男の子がだるそうに姿勢を悪くして歌っているとか……。そういう気持ちも分かるのですが、大学生ぐらいになると、カラオケでは自分からマイクを持って歌う。その差ってなんでしょうね(笑)。そんな中学生に伝えたいのは、「音楽がない世界を想像してごらん。君はだるそうに音楽の授業を受けているけれど、君は音楽なしでは生きられないんだよ」ということです。若い人には「自分にとっての音楽は何だろう？」という問いを、頭の片隅に置いてほしいです。音楽は楽しむだけではなくて、自分自身を投影する鏡であることも伝えたいかな、ちょっと難しいけれど。

V: 自分にとっての音楽を考えるということは、まさに鏡を見るかのように、自分と向き合うことに似ていると感じます。

反田: はい。そのためにはやっぱり、若い人に音楽を好きな気持ち

4 ショパン国際ピアノコンクール:5年に一度開かれる世界屈指の国際音楽コンクール。第18回は2020年に予定されていたが、コロナ禍の影響で1年延期して開催された。日本人が第2位になったのは反田恭平さんが2人目で、第8回(1970年)の内田光子さん以来51年ぶり。日本人の第1位受賞はまだない。

……… 中学生に伝えたいこと ………

『中学生の器楽』 口絵用インタビュー

2019年2月、佐渡裕氏の指揮で日本センチュリー交響楽団と反田恭平さんによるツアーが開催されました。このツアーで反田さんが演奏したのは、ラフマニノフ作曲『ピアノ協奏曲第3番』です。7公演目となった岐阜県の不二羽島文化センターでの演奏会後に、反田さんの楽屋でお話を伺いました。

大切なのはコミュニケーション

V: 本日の公演、とても楽しく拝聴しました。お客さんの拍手も、なかなか鳴り止みませんでしたね。

反田: 僕も演奏していて楽しかったです。普通に合わせるだけでも難しい作品なので、ツアーの初日はちょっと苦しかったんですけど、毎日リハーサルを重ねていくうちに、だんだんよくなって、今はめちゃくちゃ楽しいです。

V: 反田さんは多くの公演を行っていらっしゃいますが、ソロとコンチェルトでは心構えが異なりますか？

反田: まず、音量がちよっと違います。会場によっても変わりますが、コンチェルトが100~120%ぐらいだとすると、ソロでは90%ぐらいに抑えています。ソロは1人きりの世界なので、全ての責任を自分が負うわけですが、コンチェルトの場合は指揮者やオーケストラと一緒に、そうはいきません。責任感は、ソロよりもコンチェルトのほうが大きいかもしれませんね。

V: コンチェルトにおいて、大切にしていることは何ですか？

反田: オーケストラのメンバーと仲よくなることです。特に今日

演奏した作品は、オーケストラのメンバーと仲よくなければ弾けません。ふだんから少しずつコミュニケーションをとることで、音楽をつくるうえでも会話がしやすくなりますし、オーケストラも指揮者も心を開いて演奏してくれます。「おはようございます」という挨拶の一言で、音楽が変わるんです。

V: 演奏中、反田さんが何度もオーケストラのほうを見ながら、弾いていらっしゃるなと思いました。

反田: はい、目を合わせながら演奏しています。指揮者のタクトさばきがどんなによくても、演奏者間でずれることはありますので、指揮だけでなく、演奏者の動作や弦楽器の弓の動きなどを目視して、しっかりそろえることを心がけています。僕は子どもの頃からサッカーや合唱コンクールなど、みんなで一つのことをつくり上げるのが好きでしたから、コンチェルトも楽しくて大好きです。音楽で会話をしている感じがします。全国ツアー11公演中、今日で7回目が終わりました。残り4回と考えると寂しいです。

ピアノは相談相手

V: 反田さんは、いつ頃から音楽を学び始め、ピアニストを目指すようになったのですか？

反田: ピアノに初めて触ったのは4歳頃です。でも、そのときはほんとうに興味程度でした。僕は子どもの頃サッカーのクラブチームに入っていて、サッカー選手になりたかったんです。プロを輩出するようなチームに所属していたのですが、手首をけがしてその夢を諦め、ピアノに向き合うようになりました。その頃のピアノは、自分を慰めてくれるものでした。本格的に習い始めたのは小学校6年生からです。

V: そうだったのですね。

反田: 6年生の夏休みに、指揮者の曾我大介先生が行っていた指揮のワークショップを受けたことが僕にとって大きな転機となりました。最終日は実際にオーケストラを振ったのですが、80人ぐらいのオーケストラを相手に、一振りただけで音が鳴った。あの瞬間が衝撃的でした。「ピアノを習っているけれど、指揮者になりたい」と曾我先生に伝えたと、「まずはピアノを極めなさい。極めたら指揮をしてもいいんじゃないかな」と言われました。そこからオーケストラやコンチェルトを好きになったのかもしれません。ピアニストという職業があることを知り、なりたと思ったのは中学校2年生のときでした。

V: 反田さんは、どのような中学生でしたか？

反田: あまり大きな声では言えませんが、廊下を走ったり、配膳台の上に乗ったりして、生活指導の先生に叱られるような子どもでした。クラスに1人はいるお笑い担当みたいな。小学生の頃は運動会の応援団長もしていました。

ピアノに自分の感情をぶつけると、
全て音で返ってくる。
うれしいとき、悲しいとき、
怒っているときで音が変わり、
それがおもしろかったです。



V: ご両親は反田さんが音楽の道へ進むことについて、どのようにお考えでしたか？

反田: 当時、母は100%応援、父は100%反対でした。でもそれが逆によかったと思うんです。父の反対があったからこそ、中学校2年生頃から「俺はうまいから！」と自分に言い聞かせて、ものすごく練習するようになりました。そして母は僕の練習を応援してくれました。

V: 中学生でプロになろうと決めて、つらいことはありませんでしたか？

反田: ピアノのレッスンがあると、思うように友達と遊べないんですね。「なんで自分はピアノをやっているんだろう」と考えたことや、ピアノをやめたいと思ったこともありました。でもやっぱりピアノに向き合っていると、「ああ、僕にはこれしかないのかなあ」なんて、思うわけです。ピアノに自分の感情をぶつけると、全て音で返ってくる。うれしいとき、悲しいとき、怒っているときで音が変わり、それがおもしろかったです。何かあると、音楽室や自宅のピアノを弾いていました。ピアノはいつ何を話しかけても、僕の心の声を聞いてくれる相談相手だったんです。

V: その感覚は、大人になってからも同じですか？

反田: はい、今もそうです。迷ったり、もやもやしたりすることがあると、ピアノの前に座って好きな曲を弾くんです。するとなんだか楽しくなって、弾いているときだけ、嫌なことも忘れられます。

V: 反田さんがこれまでの経験で感じた、音楽の魅力を教えてください。

反田: やっぱ、言葉がいらぬことですね。特にモスクワに留

○ 反田恭平(そりた・きょうへい)

2021年第18回シヨパン国際ピアノコンクールで日本では半世紀ぶりの第2位を受賞。2016年のセンセーショナルなデビュー・リサイタル以降、毎年定期的リサイタルやオーケストラとのツアーを全国で行っている。2018年からは室内楽や自身が創設したジャパン・ナショナル・オーケストラのプロデュースも行っており、2021年5月にはオーケストラのための新会社を立ち上げ、奈良を拠点に世界にむけて活動を開始した。2019年にはイーブラスとの共同事業でレーベルを立ち上げ、2020年のコロナ禍ではいち早く有料のストリーミング配信を行うなど、クラシック音楽の普及にも力を入れている。若手の音楽家とファンを繋ぐ音楽サロン「Solistiade」も運営している。2014年チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院を経てF.シヨパン国立音楽大学(旧ワルシャワ音楽院)研究科在籍。

学して感じました。初めて会う人に自己紹介するよりも、演奏するほうが、相手に自分の性格や思いが伝わるような気がします。僕自身、留学先ですぐにはロシア語を話せなかったけれど、ピアノを弾くことで友達が増えていきました。練習室をのぞいて「君、どこの人?」「うまいね」とか声を掛けてくれました。ありきたりですが、言葉がいらぬってすごいことです。目に見えないものが動き、人の心に入って感動を与えるっていいなあと思います。

V: 最後に中学生へメッセージをお願いします。

反田: まずは、音楽を学んでいる人へ。「継続は力なり」という言葉があるけれど、ほんとうにそのとおりです。自分が選んだ楽器を、ずっと毎日続けて練習してください。自分を客観視して、苦手な部分を克服しながら、得意な部分を磨いてほしいです。また、音楽を習っていない人には、これからの人生の中で、「いいな」と思うアーティストや曲を見つけたら、その瞬間を逃さないでほしいと思います。インターネットなどで調べて、聴いてみてください。それらはあなたの感情を豊かにするはずですよ。最後に、皆さんには、学校で勉強する全教科を大切にしてください。全ての教科はつながっていて、そこからさまざまな知識や経験を得ることで、よりよい人生が歩めると思います。



『中学生の器楽』p.2・3



めあてを説明する菅原先生

授業者に訊く①

今回の「授業者に訊く」でご紹介するのは、川越市立高階たかしな小学校の5年生の授業です。グループ活動やクラス合唱で『夢の世界を』を生き生きと表現する児童の姿がたいへん印象的でした。対談では、コロナ禍における指導の注意点や、授業を通してあらためて感じた歌唱指導の大切さなどについて、お話を伺いました。

授業者：菅原佳奈（川越市立高階小学校）

聞き手：三宅悠太（作曲家）

※取材は感染症対策を講じたうえで2021(令和3)年11月に行われたものです。顔写真撮影時のみ、マスクを外しています。
※授業は窓を開けて常に換気したうえで行っています。

授業の位置付け

児童が主体的に曲の「おいしさ=魅力」に、気づき、それを引き出し、味わい、実感し、生かし、伝える。「音楽を形づくっている要素」を手がかりに作曲者が仕掛けた音楽の「おいしさ」を楽譜から見つけ出し、何度も歌いながら実感し、さらに自分たちの思いをプラスして歌います。授業では、児童の思いや意図をGoogle Jamboardにまとめ、グループごとに歌い方を工夫します。教師は、児童の工夫と曲の「おいしさ」の素となっている要素を関連付けて価値付けしていくことで、曲の「おいしさ」を実感できるように働きかけます。

授業の流れ

| | |
|------------|--|
| 教材 | ○『夢の世界を』 |
| 学習の内容、学習活動 | 導入 ○体ほぐしと発声練習。 ○『夢の世界を』を全員で合唱する。 ○授業のめあての確認。 |
| | 展開 ○作詞者や作曲者の役割と、音楽の「おいしさ=魅力」について、図を用いて解説を行う。 ○6つのグループに分かれて『夢の世界を』を10分間練習する。 ○グループごとに練習成果を発表し合う。 |
| | まとめ ○教科書を用いて歌唱のポイントを確認する。 ○最後に『夢の世界を』を全員で合唱する。 |



三宅悠太先生(聞き手)と菅原佳奈先生(授業者)

音楽の「おいしさ」を主体的に学ぶ



全員で『夢の世界を』を歌う

心を開く音楽の授業

三宅：子どもたちの歌声がとてもすてきで印象的でした。校長先生のお話の中に「子どもの自己肯定感を高める」という言葉がありましたが、それについて菅原先生が大切にされていることはありますか？
菅原：このクラスの特徴でもあるのですが、一人一人がすごくのびのびしてい

て、子どもたちは思ったことをすなおに感じて発信してくれます。それこそ授業で、「分かんない！」とか「無理ー！」とか言う子もいるし。でも、そういうことをすなおに言えるってとてもすてきだなと思うんです。友達が「分からない」と言ってくれることで、安心できる子どももいます。「分からなくてもいいんだ。みんなや先生とがんばれば、きっと分かる

ようになる！」という安心感を大切にしたい、児童が今の自分をすなおに出せる環境をつくりたいと思っています。そのすなおなつぶやきから、本時の目標に迫る、キラッと光る言葉が見つかることがたくさんあります。
三宅：授業を通して子どもたちが心を開いているなと感じる場面が多々ありました。
菅原：「統制された音楽は美しいけれど



○ 三宅悠太(みやけ・ゆうた)
作曲家

体化すると、学びが生きたものになりますよね。それと併せて、音楽ですからもちろん、言葉に表せない次元の感覚を抱くことに対しても、価値を認めてあげる言葉掛けが出来たらよいですよね……。

ハミングで奏でた『旅立ちの日に』

三宅: コロナ禍で、現場の先生方や子どもたちは、ほんとうに大変な思いを重ねられていることと思います。

菅原: コロナ禍は音楽の授業以外にも、給食や友達との交流といったさまざまな場面で制限がありました。しかし、本校の子どもたちはそれを悲観せず、制限された中で“今できる楽しいことは何だろう”と常に意識しながら生活しており、心が洗われる思いでした。また、歌えないときがあったからこそ、歌える気持ちよさや楽しさ、「声を合わせる、心を一つにするってこういうことなんだ」ということを実感することができました。コロナ禍を通して音楽の尊さに気付けたことが、とても価値のあることだと思います。

三宅: 子どもたちの歌声を聴かせていた

だいた、マスクの存在が全く気になりませんでした。初めてマスクをして歌ったときの様子はいかがでしたか？

菅原: そうですね、じゃまだなという顔をして歌ってました(笑)。当初はマスクで歌うことすら禁止されていて、口を閉じた飛沫の飛ばないハミングで、ほぼ年間計画通りに歌ってました。卒業式では6年生が『旅立ちの日に』をハミングで歌ったんですよ。市のガイドラインで、卒業式では国歌も校歌も歌うことが禁止されていました。歌いたくても歌えないという子どもたちの悩みや苦勞、そこに向き合ってがんばってきた姿が全員のハミングから強く伝わってきて、ふだんの合唱の響きとは違う感動があり、忘れられない卒業式になりました。

三宅: 想像しただけでも胸がいっぱいになりますね。歌が禁止されたからといってゼロにせず、ハミングに転換された先生方の柔軟さにも感銘を受けました。

グループ活動とICTの活用

三宅: 先ほどの授業の中で、『夢の世界

を』をグループごとに歌う場面がありましたが、このグループ活動は先生が大事にされている授業のスタイルなのでしょうか？

菅原: グループ活動は、より個々の意見が尊重され、主体的で対話的な学習となるので、ペアやグループで学び合う学習形態は大事にしています。

三宅: 菅原先生の授業は作曲家や作詞者の意図を表現して終わるだけでなく、そこにきちんと子ども自身の思いや意図を重ねて自己表現につなげている点が素晴らしいと思いました。

菅原: この題材では、まず作曲家・三宅悠太先生のお言葉「よい演奏とは」を紹介し、「作曲者の思いや意図に着目して曲のよさを実感する」という見通しをたてました。次に、二部合唱を通して、児童に曲の「おいしいところ」や好きなどころを探してもらいました。そして、作曲家・橋本祥路さんの思いを紹介し、グループごとに曲のよさを工夫して表現するよう指導しました。各グループの工夫した点は、各自でGoogle Jamboardに書き込み、他のグループの意見も参考にしながら学びを深めていきました。「絶対にここだけは味わってほしい」と思う「お

いしいところ」は、事前に楽曲分析して精選しているのですが、それを私が教えてしまっただけでは意味がないんですよね。児童が曲のおいしいところを自力で見つけたときに、初めてそれが実感に変わり主体的な学びになるので、できる限り児童から意見を引き出し、子どもたちの「手柄」にできるように意識しています。

三宅: 菅原先生の児童に対する言葉掛けが印象に残っています。グループ発表のときなど個々に寄り添った言葉を掛けていて、先生がいかに子どもの「心を開く」ことを大事にされているのかを実感しました。授業中、電子黒板を使う場面もありましたが、デジタル教科書などのICT機材はよく使われますか？

菅原: 学習者用デジタル教科書普及促進事業の対象校なので、日常的に使っています。デジタル教科書は楽譜や情景画像を提示するときにたいへん便利です。拡大して児童に見やすく表示したり、書き込みをして保存できたりします。大型モニターに参考資料や伴奏譜をスムーズに提示したり、児童一人一人の意見を集めたりするときにはGoogle Jamboardが有効で、ふだん聞けない児童の声をみんな



○ 菅原佳奈(すがわら・かな)
川越市立高階小学校 教諭

感動しない。子ども一人一人が心を開いて、しっかりと客席を向いて、自分たちの気持ちを届ける。そんな主体的な演奏が僕は好きです。」以前、合唱部の指導の際に三宅先生が仰った言葉が強く印象に残っています。その言葉を受けて、「児童が心を開き、主体的に音楽のよさを実感し、表現できる指導」について、常に意識するようになりました。子どもたちとの信頼関係や音楽の本質を味わうための楽しい授業など、大切なことが少しずつ見えてきて、実践しているところです。

三宅: 音楽を通して子どもたちの心を開くことが何よりも大切なことだと思いますので、それが豊かに根付いていることに心を動かされました。感覚と知覚が一



導入の体ほぐし



グループ発表の様子

で共有することができます。ただこれらの機材は、確実に効果が見込めるときにしか使わないようにしています。どんなにICTがすばらしくても、音楽の授業では「生の音」、子ども同士の言葉や音楽でのコミュニケーションをいちばん大切にしたいと思っているからです。

歌唱を通して大切にしたいこと

三宅: コロナ禍が少しずつ改善し、歌える機会もこれから増えていくと思いますが、あらためて歌唱の授業を通して先生が目指したい、また大切にしたいことは何ですか？



最後に『夢の世界を』を全員で歌う

菅原: 歌えないときがあったからこそ気付くことのできた、音楽の尊さや歌うことの喜びを忘れないでほしいですね。いちばん大切なのは、心も体も元気なこと。もう少し欲を出して言うと、心に響く子になってほしい。音楽のよさ、楽しさを実感して表現できる子。そして、みんなと一緒に学ぶよさを味わいながら、学び合える子になってほしいです。子どもたちは、「自分が楽しい=授業が楽しい」ではなく、「自分も楽しかった、友達も楽しかった、だから今日は楽しかった」なんです。「ぼくはできたけど、友達はできなかった」ではだめで、「ぼくもできたけど、みんなもできた。だからうれしい!」なんですよね。

三宅: 心も体も元気というのは、菅原先

生ご自身の雰囲気にもにじみ出ている。子どもたちの歌う『夢の世界を』はとてものがやかで、サビの「さあ」の部分はしなやかさと優しさをもって……音楽的な水準も合唱部の演奏かなと思ったぐらいです。

菅原: 最近、自分のピアノの先生の奏で



グループ活動の様子

菅原: 子どもたちが無意識にやっていることを教師が価値付けることで、意識してできるようにすることが大切だと思います。

三宅: また授業や部活動を拝見したいと思いました。本日はお忙しいところありがとうございました。



対談の様子

る音から感じたのは、授業や日常の中の音楽や言葉、環境そのものが、児童に直接働きかける成長の素になっているということ。まさに「百聞は一見にしかず」で、特に子どもは音から感じるものがたくさんあると思います。だから自分自身の音も磨き続けていきたいと思っています。

三宅: 子どもが無意識に感じているものから成長する部分は、非常に大きいですよ。

校長先生より

本校は来年度100周年を迎える、歴史と伝統がある学校です。保護者と地域の方々に支えられながら、日々、教育活動を進めています。学校教育目標に「なかよく・かしく・たくましく」を掲げ、「知・徳・体」のバランスのとれた生きる力を身に付けられるように、日々取り組

んでおります。また、「めざす学校像」に「笑顔いっぱい、花いっぱい、歌声いっぱい」を設定し、整えられた学習環境の中で自己有用感や自己肯定感を高める教育を展開しております。菅原先生はまさに「歌声いっぱい」全校に毎日きれいな歌声を届けてくれています。児童一人

一人に自信をもたせる教育活動を推進していらっしやいます。

鴨下正彦 先生
川越市立高階小学校 校長



導入のウォーミングアップ

授業者に訊く②

次にご紹介するのも、小学校5年生の歌唱の授業です。令和3年に開校120周年を迎えた目黒区立中目黒小学校を訪れました。子どもたちは、今回の取材に合わせて、開校記念として製作されたオリジナルTシャツを着てくれていました。対談では田中裕美先生が指導の際に心がけていることや大切にしていることについて、お話を伺いました。

授業者: 田中裕美 (目黒区立中目黒小学校 主幹教諭)

聞き手: 田中安茂 (合唱指揮者・合唱指導者)

※取材は感染症対策を講じたうえで2021(令和3)年11月に行われたものです。顔写真撮影時のみ、マスクを外しています。
※授業は窓を開けて常に換気したうえで行っています。

授業者の本時の位置付け

- 題材「歌声をひびかせて心をつなげよう」/本時のめあて「ひびく声で歌おう」
- 『ひびく声で歌おう』のために何を鍛え、そのためには何が大切かを確認し、教材『Believe』『すてきな一歩』で、「裏技」や「実演」を駆使しながら、音楽を形づくっている要素と曲想との関わりについて考え、歌詞の内容と曲想にふさわしい表現を工夫しながら、自然で無理のない、響きのある歌い方で歌う学習。

授業者の授業の流れ

| | |
|---------------|--|
| 導入 | <ul style="list-style-type: none"> ○『開校120周年の歌』を元気に歌い、歌う雰囲気をつくる。 ○軽い体操やプレス等のウォーミングアップをする。体を通して息が流れていることをあらためて意識する。 |
| 学習の内容、学習活動 展開 | <ul style="list-style-type: none"> ○今日の学習目標を確認する。 ○『ひびく声』で歌うために大切なことを確認し、いろいろな裏技を使いながら、めあてを達成していくことを知る。 ○いろいろな発声練習を取り入れながら『Believe』を歌う。 ○『Believe』を無理のない自然な声で歌ったり、声が重なる互いの声を聴き合ってバランスを考えたりしながら二部合唱する。 ○『すてきな一歩』で曲の特徴を生かして歌う学習に実演を取り入れながら主体的に取り組む。リズムや歌詞の内容と曲想との関わりを生かしてどのように歌うか思いや意図をもって表現する。 |
| まとめ | <ul style="list-style-type: none"> ○声が重なる面白さを感じ取って『Believe』『すてきな一歩』を二部合唱する。 ○家庭学習で学習用情報端末を使ってふり返りの回答を書き入れることを伝える。 |



田中安茂先生(聞き手)と田中裕美先生(授業者)

旋律と言葉を大切にした歌声づくり



○田中安茂(たなか・やすしげ)
合唱指揮者・合唱指導者

開校120周年を記念して

田中安茂(以下、Y): 中目黒小学校は12月に開校120周年を迎えるそうですね。今日の授業で最初に歌った中目黒小学校の『中目黒120周年の歌』は先生が作曲されたそうですが、歌詞はどなたが書いたのですか？

田中裕美(以下、H): 夏休みになる少し前に、代表委員会の子どもたちから「田中先生、120周年記念の歌をつくって

ださい」と頼まれたのがきっかけです。私に詩心がないので(笑)、詩は子どもたちに考えて欲しい。と伝えました。そこで、代表委員が全校児童へ発信してキーワードになるような言葉を考えてもらい、そのキーワードから詩を考えました。

Y: 旋律を先につくられたのですね。

H: そうです。どんな感じの曲がいいか代表委員の子どもたちに聞いてみたら、「明るくて元気な感じで、1年生から6年生まで歌える曲をお願いします」と言われました。

Y: 完璧な依頼ですね。

H: その思いを受けて、この曲を歌う事でみんなが笑顔で元気になれるように明るくリズムカルな曲にしようと考えました。最近のヒット曲のように最初にいきなりの出だしとサビをもってきました。シンコーペーションのリズム、跳躍音程を使わない、音階で前に進むように注意してつくりました。曲は5分ぐらいで出来上がりました。

Y: それはすごいなあ。先にできていたメロディーに、歌詞の「何があっても あきらめない」などの子どもの言葉がうまく合いましたね。みんな元気に歌っていて、自分たちの歌を歌う喜びにあふれていると感じました。

H: 本校では115周年のときも周年歌をつくるなど、こうした活動が慣例になっているようです。子どもたちのすなおな言葉がすてきな詩になりました。また、今日は120周年記念のTシャツを担任の

先生が着るように提案してくださいました。このTシャツ、保護者の方がデザインした全校児童へのプレゼントなんですよ！

Y: そうそう、気になっていました。保護者の方がそうして関わり協力してくださるのはすばらしいですね。学校全体として表現する意欲を大切にしていると感じます。式典は歌なしでは考えられないし、音楽科の先生が重要な役割を担います。今日の授業の導入の歌声からも、周年行事を控えた学校の充実した雰囲気が伝わってきました。

コロナ禍でもできること

Y: 今日の授業では、本来ならば5年生になって最初に扱う教材を取り上げていました。新型コロナウイルス感染防止の影響で、これまでは歌うことができなかったためでしょうか？

H: そうです。コロナ禍では目黒区のガイドラインに沿って歌唱授業を行ってきました。CDをかけながら口ずさんだり、ハミングで歌ったり、リップロールをしたり、息だけで歌ったり、リズム打ちをした



学習内容を示す田中裕美先生

りするという感じで工夫しながら歌唱活動をしてきました。みんなで一緒に思いつき声を張り上げて歌うことはできませんでした。『Believe』も『すてきな一歩』も子どもたちに人気があるので、緊急事態宣言の解除後にあらためてのびのびと歌わせたいと思い、今回の授業で題材を入れ替えて実践しました。

Y: 先日訪問した学校では、「歌わせませんでした」と言っていました。ハミングや母音唱では飛沫が飛ばないので、やらせてもいいのではと思うのですが、小学校が特に慎重に捉えてしまうのは仕方ないことかもしれませんね。それに比べると、中学校のほうが歌っている印象です。

H: 緊急事態宣言の期間、歌唱ができないときは、鑑賞や10月末に実施する学習発表会へ向けてクラス合奏に取り組みました。ただ演奏するだけでなく、曲紹介も考えるように伝えると、子どもたちが曲のイメージに合わせて寸劇をつくって発表してくれたのです。こういう活動があったので、子どもたちの心のつながりができて、声を出しやすい雰囲気になりました。

Y: 5年生の年度初めの子どもの状態と11月とでは、歌声にも変化がありそうですね。

H: 5年生でクラス替えがあり、最初はこのクラスでどうやっていこうかと子どもたちも遠慮し合っていました。今では子どもどうしの仲間意識が育ち、安心して声を出す雰囲気ができてきました。

Y: 数か月で子どもたちは大きく変わるんですね。



胸郭をを広げて模範を示す子どもたち

H: そうですね。『Believe』を歌ったとき、子ども自身が詩の内容などを考えられるようになったのかな、と感じることがありました。自分だけで歌っているんじゃない、ということが分かってきたというか、友達と歌い合わせる楽しさや喜びも感じられるようになってきました。

Y: 4年生のときも先生が指導されていたのですか？

H: はい。今日の子どもたちは、3年生のときから指導しています。

Y: そうなんですね。先生の指導の成果がしっかり実を結んだのですね。3、4年生で特に意識して指導してきた内容はありますか？

H: リトミック的な活動を多く取り入れています。曲の感じに合わせて自由に歩きながら歌って止まったり、滑らかに動いたり、はずんでみたり、強弱を動作で表したり。そうした活動をいろいろな楽曲につなげて学習してきました。また、歌集を使ってたくさん曲を歌い、歌う雰囲気づくってきました。

発声の指導法

Y: 今日の授業は、「歌声をひびかせて心をつなげよう」という題材でしたが、「声をひびかせる」ための先生の指導がたいへんすばらしいと思いました。背筋を伸ばし胸郭を広げるのは歌唱の基本ですし、それをウォーミングアップに取り入れていました。

H: 授業の始めでの声を出すムードづくりは大切にしています。今は子どもどうしが接触していませんが、ペアでの体操を取り入れながらプレスの練習をしたりもしています。

Y: クラスの中から3人が前に出てきて、



○田中裕美(たなか・ひろみ)
目黒区立中目黒小学校 主幹教諭

胸郭を広げる模範を実演しました。胸郭を広げることは声帯の働きにつながっていくので、大事なポイントを把握されているのがすごいと思いました。

H: 都の合唱研究会に所属していて、先輩や会員の先生方、講師の先生方からたくさん教わってきたことを取り入れて試しています。今日の授業では「よい例(子どもたち)」「悪い例(私)」で比較させました。視覚的に捉えられてすぐに理解できるので効果的です。比較はよく実践しています。



「裏技」を取り入れて指導する

Y: 見よう見まねでは指導できませんし、先生の中にきちんと裏付けができていからだろうと思います。ところで、いちばん右にいた男の子が声変わりして1オクターブ下げて歌っていました。最後に「裏声で歌ってごらん」と声を掛けたら、いい声が出たんですよ。5、6年生で1オクターブ下げてしまう子はたくさんいますが、きちんと育てれば裏声も出せます。今日の子もそのとおりでした。

H: ありがとうございます。先生の声掛けできっと自信がついたと思います。授業の初めに子どもたちと「ひびくいい声」について確認したのが生かされました。

Y: 「このまま両方できるよ」と言ったら本人もうれしそうでしたし、裏声と地声は分けて練習したほうがよいと思います。裏声の部分と地声の部分をそれぞれ強化して、最後に融合する。小学校では裏声と地声で急に変わってしまうと悩んでいる先生がいますが、いわゆるミックスボイスにするのがよいのではないのでしょうか。息の問題とは別にして、声帯の働きについて教師がきちんと理解しておくことが大切だと思っています。

H: これまで「最近、高い声がちょっと出

しづらい」と恥ずかしそうに言ってくる男の子はいました。「裏声でいいんだよ」と伝えてきましたが、変声期の子の声の出し方の指導をもう少し工夫できていたらよかったです、先生とお話して感じました。授業では全体指導をしてしまいましたが、あらためて一人一人の声域を知ってその子に合うアドバイスをして自信をつけさせてあげるのが大事なポイントだと痛感しました。

Y: 高学年で1オクターブ下げてしまう子を、変声期のせいにしてしまうのは間違っていると思います。裏声をうまく活用するよう練習すれば、子どもは自信をもつはずですよ。

H: 今日先生にほめていただいた子どもを見て、そのとおりだと思いました。

子どもたちの声への意識

Y: 『Believe』や『すてきな一歩』で「ひびくいい声」で歌うために、先生はA(ラ)の音から裏声で歌うことを取り入れていました。とてもきれいに歌えていましたし、曲の特徴にふさわしい表現を工夫するよう、いろいろと言葉を掛けていましたね。

H: 『すてきな一歩』では、表現をより深めるために、歌詞の内容をイメージして歌えるような言葉掛けを考えました。また、歌詞の内容に合わせて動作化(演技)したり、歌の途中でセリフを入れたりして詩の世界を歌で表現して伝えられるように工夫しました。

Y: 子どもたちからは「顔を明るくする」「笑顔で」という表現が出てきましたね。そのあと歌いながら段階的に、姿勢、言葉、口の中の状態の指導へと、舌骨筋を意識する流れになったので、たいへん驚きました。

H: ありがとうございます。授業の最後の数分間でしたが、先生に直接子どもたちを指導していただきました。先生が「息を吸いながら歌ってみよう」と仰ったあと、子どもたちの歌声がパッと響くいい声に変わったので、とてもびっくりしました。子どもたちも手ごたえを感じていました。新たな技を教わり、たいへん勉強になりました。

Y: いえいえ、中目黒小の子どもたちもともと上手だったからです。今日の授業の中で、喉の奥を開けるポイントを先生が尋ねたとき、「スムーズを吸うように」と言った子がいて、「おお、すごいな」と思いました。私が息を吸いながら歌ってごらんと言ったのは、声帯を伸ばしたいからです。息を吸いながら声を出すと、声帯がよく伸びるんです。歌うためには声帯の長さがとても重要で、そのまま歌えば裏声も強化されるし、地声でもそれができます。

H: 「スムーズを吸うように」という発言と関連していたのですね。授業ではすごくよい発言をしていたのに、それをきちんと取り上げて反応できませんでした……。

Y: (笑)スムーズ、これは大正解だと思って子どもたちには裏声を鍛えるといいと話しました。裏声ののび方を鍛え、地声は生声にならないよう鼻にかけて共鳴させる。息を吸いながらhg～(吸う音)とすると、声帯が伸びて共鳴した地声になります。そうしていくと、いわゆるベルティングボイスができてきます。



全員で歌う

H: スムージーに関連させて、私も指導に生かしていきたいと思います。

指導で用いる言葉の工夫

Y: 先生の授業を拝見して、リズムに関することやフォルテでの声の出し方などを説明するときに、伝え方の表現をよく工夫していらっしゃると感じました。2拍3連の練習は足踏みをしなが「たったふたり」と言っていたのですね。

H: そうです。『マイ バラード』を歌ったときに2拍3連のリズムがそろわなかったので、裏技として、足踏みや手拍子で拍をとりながら「たったふたり」と言い、繰り返して言ううちに次第に「ふ」と「り」を抜いていき「たった・た・り」と言うことで2拍3連のリズムがみんなそろって出来るようになりました。体を使ってリズムを身に付

けるようにしました。

Y: すばらしいアイデアです。

H: 教員のスタートは中学校教師でした。小学校で教えるようになって印象的だったのは、「はい、フォルテ!」のように音楽用語を使って話してもなかなか伝わりにくいということでした。それでいろいろな先生方の授業を参観する中で、やはり皆さん分かりやすく伝えようとしているなあと思ひ、自分でも考えるようになりました。「裏声を響かせて歌いましょう」と言うのではなく「気取った笑いで、オ～ッホホホー」。鼻腔に響かせるために「小犬の鳴き声してみよう」など、試行錯誤しながら歌唱表現に生かせる言葉の工夫を考えています。

Y: いいですね。視点を変えてみるのは大切です。あと、「フォルテはマヨネーズ」でしたね。

H: 体をマヨネーズのチューブに見立て

て、体の中心から息が流れて頭のほうから声が出るイメージと重ね合わせています。チューブを強く押すと中からマヨネーズが勢いよく出てくるように声を出そうという作戦です。実際に息のスピードを意識させるのに役立ちます。「はい、フォルテ!」ではなく「マヨネーズの息を出すよ!」なのです。

Y: そういう先生の探求がおもしろいし、大事なことだと思います。

H: 小学校の教師になって「なかなか伝わらない!」と悩んだ時期がありました。たくさんさんの授業を見せていただき、まだまだですが今に至ります。今日も先生とお話しして、いろいろなヒントをたくさんいただきました! ありがとうございます。



開校120周年記念オリジナルTシャツ

校長先生より

本校を含め、目黒区では15校が教育課程特例校の指定を受けて、1単位時間40分の授業を行っています。目黒区の授業スペシャリストに認定されている田中裕美先生の授業では、子どもたちは音楽を大いに楽しんでいます。

私たちは全ての教科において子どもたちが主体的に学べる授業を目指しており、校内研究テーマは「自律的に学ぶ児童の育成」です。今年度は「単元内自由進度学習」という、子どもが授業そのものの計画を立てて勉強を進めるという取り組みを行っています。音楽科ではなかなか難し

いのですが、社会科や理科などでは、ガイダンスを行い、子どもたちが主体的に計画を立てて学習し、単元の終末に発表する活動を取り入れています。そして今年度は「創る」をテーマに、新しい生活様式に応じた学校生活や新しい学びをつくれるように、先生方と協力しています。

子どもたちが大人になったとき、予測しない事態がたくさん出てくることでしょう。そのときは、誰かに言われてとか、何かを待つというのではなく、自分で未来を切り拓いていかなければなりません。自分自身で問題解決のできる大人に育ててほ

しいと思うんです。

令和3年度は開校120周年という節目の年になります。大切にしていることは、保護者や地域の方々や学校との絆を深めることです。記念Tシャツの製作や航空写真撮影、田中先生作曲の120周年祝歌、そして10年後に開封するタイムカプセルなど。それらが子どもたちの記憶に残る思い出になってくれることを願っています。

よこみずたかと
横溝宇人 先生
目黒区立中目黒小学校 校長



田中安茂先生の指導

「学習者用デジタルコンテンツ」のご紹介

児童生徒一人一台のタブレット端末で活用できる、教科書に対応したデジタルコンテンツ集が、2022年3月に発売されます。その内容を紙面でご紹介します。
【Web版 体験コンテンツ】も公開していますので、実際にお手持ちのタブレット端末でぜひご覧ください。

特徴① 教科書の内容に沿って「音楽づくり・創作」の実践ができるコンテンツ

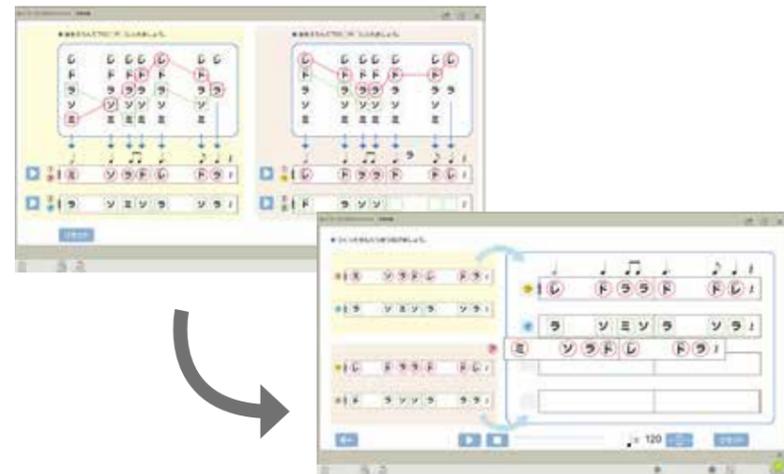
小学生の音楽2 「音楽づくり：おまつりの音楽」(P.40)

6枚のカードを使ってリズムをつくります。並べたカードを再生すると、つくったリズムを確認することができます。繰り返しを使ったところは、カードに色が付きます。



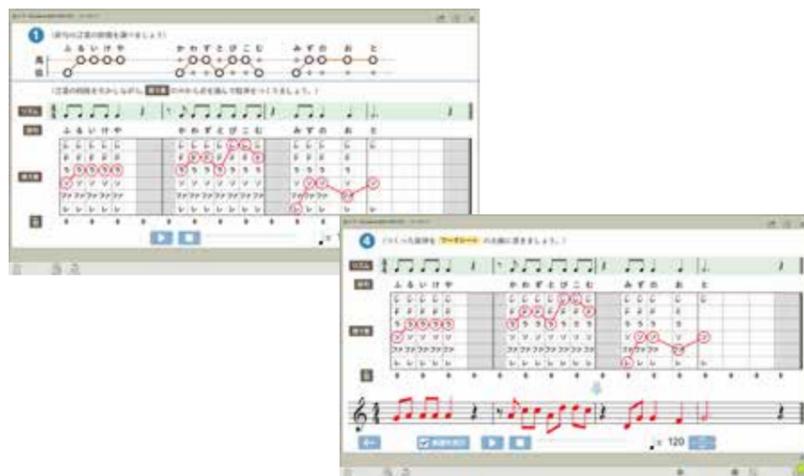
小学生の音楽4 「音楽づくり：2人でせんりつづくり」(P.60)

音を選んで2小節の旋律を2つ作り、次に、2人の組になって、それぞれがつくった4つの旋律を全てつなげて、8小節の旋律をつくります。



中学生の音楽2・3上 「My Melody 創作—音のつながり方—」(P.36)

言葉の抑揚を調べ、それを生かしながら、民謡音階を用いて旋律をつくります。発展では、リズムを変えたり、他の俳句を選んだりして、旋律をつくることもできます。



中学生の器楽 「箏 基本的な奏法」(P.43)

「中学生の器楽」は、一人一人が基本的な演奏方法や模範演奏などを動画で見て学習できる映像資料を豊富に搭載しています。



特徴② 児童生徒一人一人が活用できる「学びアイテム」

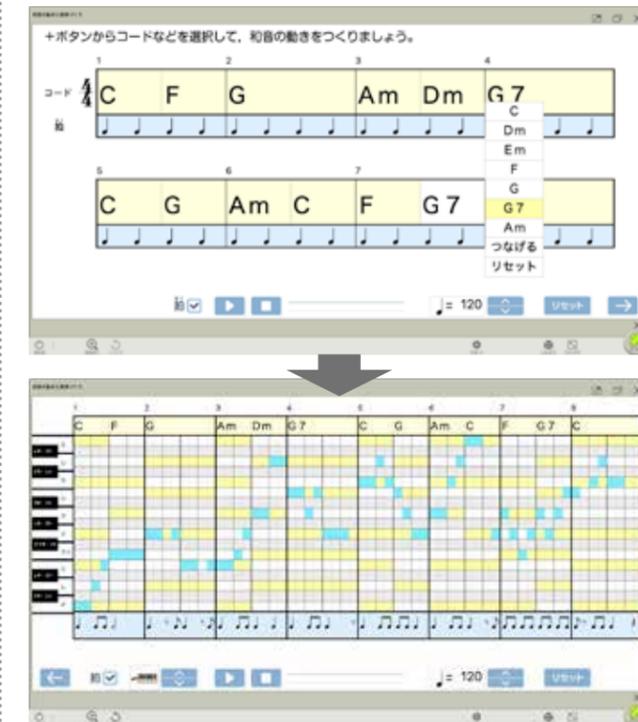
リズムづくり (小学生の音楽3～6 / 中学生の音楽・器楽)

リズムカードを並べて、リズムをつくり、拍に合わせて、画面上のボタンをタップしてつくったリズムを実際に鳴らし、正しく演奏ができたかどうかを確認することができます。



和音の動きと旋律づくり (中学生の音楽・器楽)

まず、使うコードを選んで和音の動きをつくり、次に、選んだ和音に含まれる音を参考にリズムと音を入力して旋律をつくり、つくった旋律は、音色やテンポを変更して再生することができます。



タイマー/ストップウォッチ

メトロノーム



鍵盤

リコーダー運指

指導者用デジタル教科書(教材)の「Tサポート」ボタンから起動するツールを、「学習者用デジタルコンテンツ」にも搭載しました。曲の練習や演奏、個別学習をするときに、いつでも活用することができます。
※学年により、使用できる機能が異なります。

各学年の収録コンテンツ(目次)や【Web版 体験コンテンツ】は、こちらよりご確認ください



小学生の音楽

<https://www.kyogei.co.jp/digitaltextbook/2020es/digitalcontents/>



中学生の音楽・器楽

<https://www.kyogei.co.jp/digitaltextbook/2021jhs/digitalcontents/>

- 「学習者用デジタルコンテンツ」には、教科書の紙面は含まれておりません。「学習者用デジタル教科書」や紙の教科書と併用してご活用ください。
- 指導者用デジタル教科書(教材)に収録されている動画や楽曲の音源は、一部を除き搭載されておりません。
- 「学習者用デジタルコンテンツ」と「学習者用デジタル教科書」は、一体型ではございません。

インタビュー

「学習者用デジタルコンテンツ」を、実際に体験していただきました。

「学習者用デジタルコンテンツ」では、子どもが自ら操作して音を鳴らしたり、つくった音楽を聴いたりできることで、子どもたちにとってより音楽が分かりやすくなると感じました。「学びアイテム」の「ドレミ風船」や「鍵盤」は、画面をタップするだけで音が鳴るので、鍵盤ハーモニカに息を吹き込むことが難しい子どもでも演奏に参加することができます。また、授業支援ソフトと併用することで、クラス全体で画面の共有もできるようになります。また、学校によっては全員分の楽器をそろえるのが難しい場合もあるので、「リズムづくり」などの画面から鳴らせる楽器の音をツールとして使うことも有意義だと思います。私は、最終的に子どもたちが実際の楽器に触れて音の感触や強さの違いなどを感じることが必要だと考えますが、その前段階として、どんな音が出るのか、どれがおもしろそうかなどを判断するのに、タブレットで音を知ることも一つのきっかけになるのではないのでしょうか。

また、「音楽づくり」のコンテンツは、子どもたちのプログラミング的思考の育成にもつながると思いました。私は、ICTの強みとして、共有できる、場所を選ばない、記録できる、の3点を考えていますが、例えば子どもが家からアクセスして予習として見ることもできれば、個々の学びが広がることも期待できると感じました。



神奈川県
愛川町立中津第二小学校
菊池崇徳先生



長野県
青木村立青木中学校
高野恵里先生

以前はICTを活用した授業は遠い存在でしたが、今では「指導者用デジタル教科書(教材)」がなかったときはどんな授業をしていたかな?と思うほど日々の授業に活用しています。「学習者用デジタルコンテンツ」では、生徒でも分かりやすく操作できるようになっていると感じました。教科書の内容に合わせた機能になっているので、授業で扱いやすいと思います。「器楽」の授業で映像教材を使用する際は、これまではそれぞれの生徒が意図する映像を見られない、という状況がありましたが、生徒が個別に何度も見られるようになるので、学びが止まることなくICTのよいところだと思いました。専門家の個別レッスンを受けているようなもので、たいへんありがたいことだと思います。

また、「創作」の授業では、生徒が音符を書いたり演奏したりすることが難しい場合がありますが、授業のねらいは音符を書くことではなく音楽をつくることなので、生徒自身が何度も試して確認しながら創作活動を行えるのが利点だと感じました。

「和音の動きと旋律づくり」は、使う和音を選べるので、生徒にとってコードが身近に感じられ、「自分たちでもこんなにできるんだ」という学習意欲につながると感じました。ギターの学習にも結び付きますね。旋律づくりの画面も、旋律の動きを目で追えるので、分かりやすいです。

- 「学習者用デジタルコンテンツ」は、以下の端末でご利用いただけます。
 - Chromebook (Google Chrome)
 - iPad (Safari、まなビューア専用ブラウザ [iPad版])
 - Windows PC (Microsoft Edge、Google Chrome、まなビューア専用ブラウザ [Windows版])

○商品情報は、裏表紙の「Recommend」をご覧ください。

表示ソフトウェアは「まなビューア」を採用しています。  まなビューア

デジタル教科書情報

デジタル教科書 バージョンアップ(アップデート)について

2021年11月に、以下の商品のバージョンアップデータを公開いたしました。

- 小学生の音楽 1～6「指導者用デジタル教科書(教材)」 「学習者用デジタル教科書」
- 中学生の音楽 1、2・3上、2・3下、中学生の器楽「指導者用デジタル教科書(教材)」 「学習者用デジタル教科書」

iPadOS 15 及び Windows 11 での動作確認を実施したほか、[どうぐ] ボタン(書き込み機能)の拡充や、軽微な修正を行いました。

下記ウェブサイトをご確認いただき、バージョンアップの実施をお願いいたします。

- 小学生の音楽
<https://www.kyogei.co.jp/2020vup>



- 中学生の音楽・器楽
<https://www.kyogei.co.jp/2021vup>



デジタル教科書「メール配信」の登録について

今後、デジタル教科書(小学校・中学校)のバージョンアップ等に関するご案内をメールで配信いたします。デジタル教科書をご使用の方は、右記ウェブサイトよりメールアドレスの登録をお願いいたします。

<https://www.kyogei.co.jp/digitalmail>



「指導者用デジタル教科書(教材)」クラウド配信対応について

小学校・中学校の「指導者用デジタル教科書(教材)」は、2021年12月現在、クラウド配信ではご利用いただけません。ご提供に向けて調整中ですので、準備が整いしだいウェブサイト等でお知らせいたします。また、上記「メール配信」でもご案内いたしますので、ぜひご登録ください。

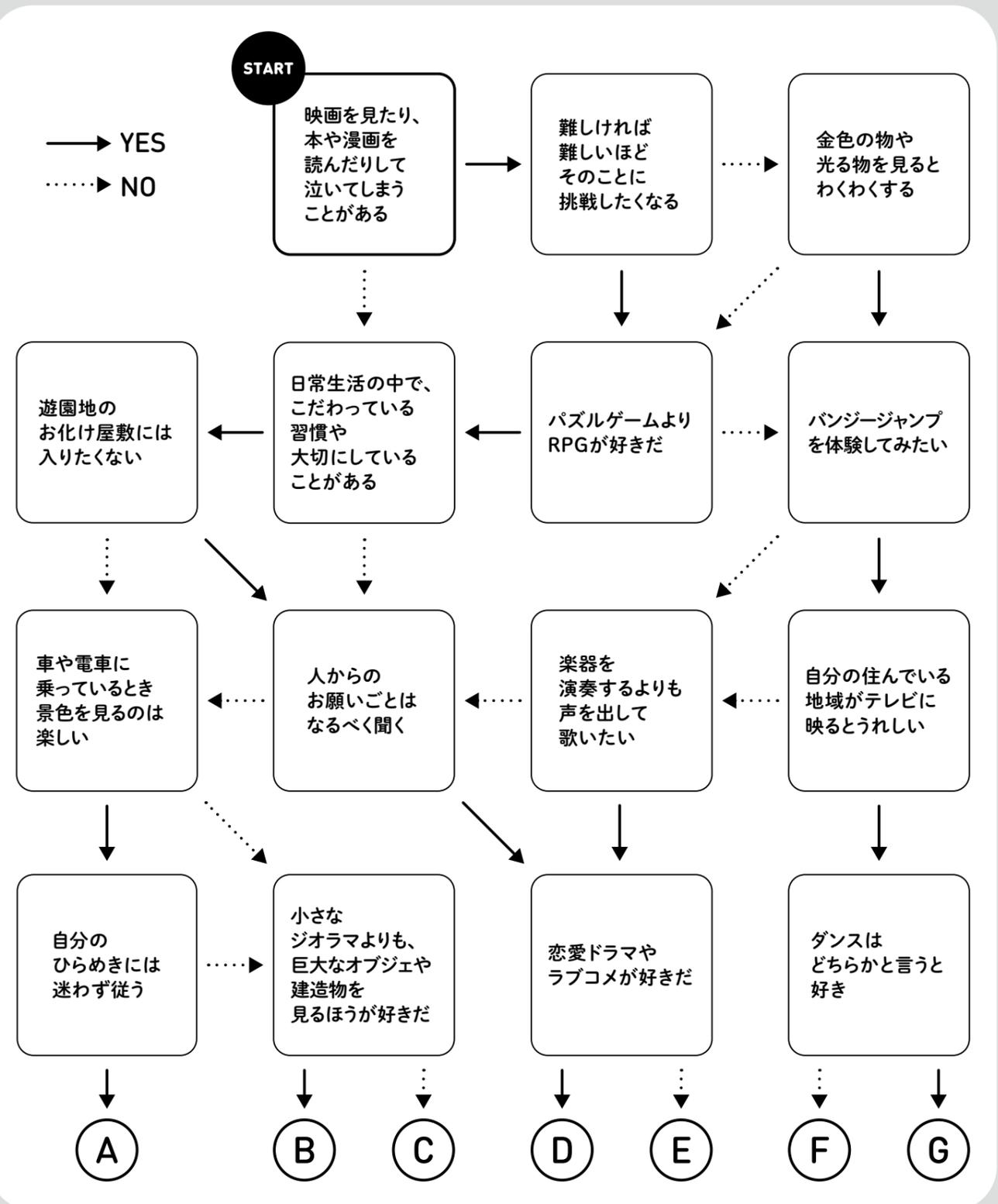
音楽診断

第13回 ショパンの名曲編

『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第13弾。
7つのショパンの名曲の中から、あなたにぴったりの作品をご紹介します。



監修・解説 = 山田治生
Text = Haruo Yamada



フレデリック・ショパン (1810~1849年)

ショパンは「ピアノの詩人」と呼ばれ、その作品はピアノ音楽の代名詞のように言われている。多少の歌曲や室内楽曲があるものの、彼が書いた作品のほとんどがピアノ・ソロのためのものであった。交響曲やオペラなどは残さず、最も規模の大きな作品は2曲のピアノ協奏曲であった。ワルシャワ近郊で生まれ、ワルシャワ音楽院で学んだ後、パリに移り、ピアニスト兼作曲家として、パリのサロンを中心に活躍。作家ジョルジュ・サンドとの恋愛が知られている。肺結核のために39歳の若さで亡くなり、再び祖国の地を踏むことはなかったが、ポーランドへの思いは強く、ポロネーズやマズルカなど、民族音楽を採り入れた作品を数多く書いた。



あなたにぴったりの作品は？

A 美しく劇的に駆け抜ける
『幻想即興曲』(『即興曲第4番』)
(作曲年: 1834年頃)

『幻想即興曲』のタイトルは、ショパンの死後、出版に際してつけられたものである。ショパンの4つの『即興曲』のなかでは最初に書かれた。主部は、右手が流れるような16分音符、左手が8分音符の3連符、と左右で違うリズムが交差する。中間部では美しい旋律がゆったりと歌われる。そして主部の再現。コーダで中間部の旋律が回想される。1834年頃に作曲された。デステ男爵夫人に献呈され、そのとき、ショパンは出版を意図していなかったという。



B 未来に思いを馳せて書かれた自信作
『ピアノ協奏曲第1番ホ短調』
(初演: 1830年/ワルシャワ)

『ピアノ協奏曲第1番ホ短調』は、ショパンがまだワルシャワにいた1830年に、『ピアノ協奏曲第2番へ短調』に引き続いて書かれた。番号が作曲の順番と逆になったのは、ホ短調の協奏曲がへ短調の協奏曲よりも先に出版されたためである。20歳のピアニストが自作の協奏曲を携えて西欧への進出を考えていた頃の野心的な作品。オーケストラの堂々とした序奏で始まる第1楽章、ゆったりとした第2楽章、ポーランドの民族音楽風の主題も現れる第3楽章の3つの楽章からなる。



C 愛くるしい小犬を描いた軽やかな音楽
『小犬のワルツ』(『ワルツ第6番』)
(作曲年: 1846~1847年)

作品64の3曲(第6番、第7番、第8番)のワルツは、ショパンが晩年(1846~47年)に書き上げたものである。第6番の『小犬のワルツ』のニックネームは、恋人ジョルジュ・サンドの愛犬が自分の尻尾を追ってくる回る姿を描いているというエピソードから、後世の人によってつけられたものである。作品はデルフィナ・ポツカ伯爵夫人に献呈された。彼女は、パリに着いたショパンをもてなし、ショパンにピアノを習ったりした。



D とびきりのメロディーを堪能
『別れの曲』(『12の練習曲作品10-3』)
(作曲年: 1832年)

ショパンの最もポピュラーな作品の一つである『別れの曲』は、『12の練習曲作品10』の第3番にあたる。1832年に作曲された。もともとは「ヴィヴァーチェ」という速いテンポで構想されたが、出版に際して、ショパンは「レント」という遅いテンポに変更した。彼の作品の中でもとびきり美しい旋律が魅力的である。その旋律は映画やポピュラー音楽でも使われるなど、広く親しまれている。中間部では転調が激しくなり、音楽が高揚する。



E シューマンも好んだ物語風の作品
『バラード第1番』
(作曲年: 1831~1835年)

ショパンの『バラード』は全部で4曲ある。ピアノ曲での「バラード」というジャンルはショパンが始めた。第1番は1831~1835年にかけて作曲された。ゆったりと低い音域から高い音域へと広がっていくラルゴの序奏で始まる。そして少しテンポを上げてモデラートとなりメランコリックな第1主題が提示される。優美で繊細な第2主題はその後情熱を帯びる。フィギュア・スケートの羽生結弦が使用した曲としても知られている。



F 圧倒的な技巧派の友人リストに献呈した
『革命のエチュード』(『12の練習曲作品10-12』)
(作曲年: 1831年頃)

『練習曲(エチュード)』とは、本来、技巧の鍛錬のための曲であるが、ショパンの『練習曲』は、高度な芸術性も兼ね備えている。『革命のエチュード』は『12の練習曲作品10』の第12番にあたる。ショパンが、1831年に祖国ポーランドを離れたのち、11月蜂起の朗報を聞くものの、パリに向かう途中、ロシア軍のワルシャワ侵攻と蜂起の挫折を知り、怒りのあまり、書かれたといわれている。ドラマティックな音楽だが、左手の16分音符の練習曲でもある。



G エネルギーに満ちた最高傑作
『ポロネーズ第6番《英雄》』
(作曲年: 1842年)

『英雄ポロネーズ』は、ショパンの最高傑作の一つ。非常に高い演奏技術が必要とする。明解で、力強く、ポジティブな音楽である。1842年に作曲された。ショパンにとっては後期の作品である。ポロネーズとはポーランドの代表的な民俗舞曲の形式。『英雄』の愛称は作曲者によるものではない。半音階を含む印象的な序奏の後、華麗に主題が提示される。中間部での右手の優美なメロディーと左手の16分音符の連打との対照が効果的。



山田治生 (音楽評論家)

1964年、京都市生まれ。1987年、慶應義塾大学経済学部卒業。著書に『トスカニーニ〜大指揮者の生涯とその時代』、小澤征爾の評伝である『音楽の旅人〜ある日本人指揮者の軌跡』、『いまどきのクラシック音楽の楽しみ方』(以上、アルファベータ)、編著書に『戦後のオペラ』(新国立劇場運営財団情報センター)、訳書に『レナード・バーンスタイン ザ・ラスト・ロング・インタビュー』(アルファベータ)などがある。

研究大会

11月

November

1日(火)・2日(水)

令和4年度 全日本音楽教育研究会全国大会
山口大会(総合大会)
第53回 中国・四国音楽教育研究大会 山口大会
KDDI維新ホール 他

〈大会主題〉

楽しむっちゃ! 音楽 ～響きあおう 感動のきずなで～

[問い合わせ]

事務局
山口県立岩国総合支援学校 教頭 古川市郎
〒741-0061 山口県岩国市錦見 3-7-11
TEL 090-8713-0580
kogawa_ichiro@yahoo.co.jp

9日(水)

第70回東北音楽教育研究大会
第60回岩手県音楽教育研究大会 紫波地区大会
田園ホール 他

〈大会主題〉

『心に音楽のよろこびを』

～音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育む
「指導と評価の一本化」の実現～

[問い合わせ] ※令和4年3月まで

事務局
紫波町立赤沢小学校 副校長 正木啓一
〒028-3535 紫波郡紫波町遠山字中松原71-1
TEL 019-672-3284/FAX 019-672-3284
postm@akazawa.shiwacho.ed.jp

11日(金)

令和4年度 第64回 関東甲信越音楽教育研究会
茨城大会(水戸大会)

11日(金)

第64回 近畿音楽教育研究大会 滋賀大会
あいこうか市民ホール 他(甲賀市・湖南市)

〈大会主題〉

つながり、かさなり、ひろがる音楽の学びを求めて

[問い合わせ]

事務局
栗東市立治田西小学校 校長 奥村真美
〒520-3024 栗東市小柿1-5-21
TEL 077-553-2017 FAX 077-553-2022

18日(金)

第64回 北海道音楽教育研究大会 十勝・帯広大会
帯広市民文化ホール 他

〈全道共通主題〉

『音楽のよさを分かち合い 確かな力を育む音楽教育』

〈大会主題〉

『音楽と豊かに関わる力を育み、
学びのつながり・広がりを実感できる音楽教育の創造』
～音楽で つながる心 つなげる学び 広がる世界～

[問い合わせ]

第64回 北海道音楽教育研究大会十勝・帯広大会運営委員会準備委員会事務局
広尾町立豊似小学校 校長 長谷川 充
〒089-2446 広尾郡広尾町字紋別18線50番地
TEL 01558-5-2144/FAX 01558-5-2150
toyonisho@luck.ocn.ne.jp

— 新作合唱曲による公開講座 —

Spring Seminar

2022

コンクール自由曲向けの新作発表会「Spring Seminar 2022」を開催いたします。

同声・女声・混声の各2曲(全6曲)を作曲者、司会者、合唱団と学びます。

- 収録による動画配信の形式で開催いたします。
- 「Nコン課題曲ワンポイントレクチャー」は実施しません。
- 詳細や最新情報は弊社ホームページ等でご確認ください。

- 申し込み：2022年3月29日(火)～7月31日(日)
- 動画配信：2022年4月27日(水)～8月31日(水)

●司会：藤原規生

作曲家：[同声] 信長貴富、横山裕美子
[女声] 山下祐加、大田桜子
[混声] 三宅悠太、なかにしあかね

- 合唱団：八千代少年少女合唱団
(指揮：長岡亜里奈)
おうたや
(指揮：田中エミ)
ユースクワイアアルデbaran
Youth Choir Aldebaran
(指揮：佐藤洋人)

●お問い合わせ：

株式会社教育芸術社
スプリングセミナー実行委員会
TEL 03-3957-1168
FAX 03-3957-1740

<https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar/>



左記のQRコードより「スプリングセミナー2021」の動画の一部がご覧いただけます。
※期間限定

教育芸術社ホームページでは、この他の研究大会やイベントなどの情報も掲載しています。

https://www.kyogei.co.jp/data_room/event/



内容は予告なしに変更になる場合がございます。

最新情報は、スプリングセミナーのFacebookでも発信いたします。

<https://fb.me/kgspringseminar/>



編集後記

私たちの生活様式が変化してから約2年たちました。この新しい環境で、自分には何ができるのか、と考える場面も増えたように感じます。今号では、コロナ禍に負けずエネルギーに音楽に取り組む方々の記事をご紹介します。

巻頭インタビューにご登場いただいたのは、ショパン国際ピアノコンクールで第2位受賞を果たした反田恭平さんです。中学生の頃からピアニストを目指していた反田さんですが、音楽への道を邁進する一方、趣味を広げることや、全教科を学ぶことの大切さを語っていただきました。

参考楽譜の『Desk Drumming』は、机を楽器に見立てて手で打ったり、手拍子を入れたりしながら、ときにはパフォーマンスも含んで演奏する楽しい音楽です。授業で活用していただけたら幸いです。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力を賜りました全ての方に、心より厚く御礼申し上げます。今後ともご支援くださいますよう、お願い申し上げます。

表紙・巻頭イラストレーション
スズキタカノリ

写真提供

ヒダキトモコ

フレデリック・ショパン研究所

イラストレーション

こばやしみさこ

表紙デザイン・本文組版
STORK

音楽教育 ヴァン



発行者 株式会社 教育芸術社(代表者 市川かおり)

〒171-0051 東京都豊島区長崎1-12-14

TEL. 03-3957-1175(代)

FAX. 03-3957-1174

<https://www.kyogei.co.jp/>

©2022 by KYOGEI Music Publishers. ©-22

本書を無断で複写・複製することは著作権法で禁じられております。

* ヴァン=“vent”はフランス語で「風」。
新しい音楽教育の地平を切り開いていく
願いを込めています。



Recommend

小学校 学校行事・授業のための新教材集

地球へ

- ふだんの授業から音楽会まで様々なシーンで使える曲を精選しました。
- 収録曲：【低・中学年】ポストに はがきを いれるとき／ほしぞら【中・高学年】素晴らしい言葉／ハッピー・バースデー／#みんなで歌おう ～歌声と幸せがあふれますように／クラッピングファンタジー 第10番 ゆかいなダンス／ジュラシック・パークのテーマ【高学年】地球へ／帰る場所／僕と君の未来へ／クラッピングファンタジー 第11番 ヘッドウェイ～力の限り前へ～／Paradise Has No Border
- 定価880円(本体800円+税10%)／B5判／48ページ
- ISBN978-4-87788-976-0

準拠CD(別売り)

- 価格1,980円(本体1,800円+税10%)／1枚 ●GES-15943

小学生のための合唱パート練習用CD

トリオン9・10

- 合唱のパート別の歌とカラピアノが収録されているので、伴奏がいなくても簡単に音取りができます。
- トリオン9収録曲：いのちの歌(三宅悠太 編曲)／PRIDE(プライド)／君をのせて／すてきな一歩／空は今／ぼくは ぼく
- トリオン10収録曲：ふるさと(youth case 作曲)／ピクトリー／風になりたい／あなたにありがとう／ひらり、／花の名前
- 各価格3,300円(本体3,000円+税10%)／1枚
- トリオン9：KGO-1201 ●トリオン10：KGO-1202

学習者用デジタルコンテンツ

小学生の音楽1～6

- 提供方法：クラウド配信／2022年3月発売
- 「学習者用デジタル教科書」+「学習者用デジタルコンテンツ」セット 1ライセンス 各学年1,540円(本体1,400円+税10%)
- 学習者用デジタルコンテンツ [スクールパック 1年間版] 各学年11,000円(本体10,000円+税10%)
- 学習者用デジタルコンテンツ [スクールパック 2年間版] 各学年20,900円(本体19,000円+税10%)



クラス合唱用 MY SONG 7訂版

- 定番曲から新曲まで、魅力的なラインナップによる全64曲。混声二部、感動を呼ぶ新曲、混声四部合唱の掲載曲をさらに充実させました。
- 難易度や対応するONTAの情報、各曲のプロフィールなど、選曲に役立つ情報を目次に掲載しています。
- 定価860円(本体782円+税10%)／B5判／352ページ
- ISBN978-4-87788-971-5

準拠CD(別売り)

- 上巻：価格7,920円(本体7,200円+税10%)／3枚組
- GES-15921～15923
- 下巻：価格8,800円(本体8,000円+税10%)／4枚組
- GES-15924～15927

Chorus ONTA Vol.28

- 混声合唱のためのパート練習用CD。「MY SONG 7訂版」掲載曲と最新のクラス合唱を中心に全12曲を選曲しました。
- 収録曲：地球の詩(2021年編曲版)／歌が息をする／夢を追いかけて／幸せ／心のキャッチボール／ハートのアンテナ／大地のように／このみち／四季の歌／あの山を思い出そう／歓喜の歌／足跡
- 価格13,200円(本体12,000円+税10%)／4枚組
- KGO-1197～1200

学習者用デジタルコンテンツ

中学生の音楽1/2・3上/2・3下

学習者用デジタルコンテンツ・映像資料

中学生の器楽

- 提供方法：クラウド配信／2022年3月発売
- 「学習者用デジタル教科書」+「学習者用デジタルコンテンツ」セット 1ライセンス 各巻1,540円(本体1,400円+税10%)
- 学習者用デジタルコンテンツ [スクールパック 1年間版] 各巻11,000円(本体10,000円+税10%)
- 学習者用デジタルコンテンツ [スクールパック 教科書使用期間版] 各巻29,700円(本体27,000円+税10%)

